

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02047

研究課題名(和文) 西部モンゴル遊牧民による気候変動および極限環境への適応戦略の解明

研究課題名(英文) Explication for Strategy of Adaptation to the Extreme Environment and Climatic Variation by Nomadic Herders across Western Mongolia

研究代表者

相馬 拓也 (SOMA, Takuya)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：60779114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、極北系モンゴル遊牧民の極限環境への適応戦略を、フィールド調査によって実証的に解明した。とくに古来、受け継がれてきた生存戦略と減災術の伝統知(TEK)について、合計10回(約200日間)の現地調査と、300人以上のインタビューにより、膨大なオーラルヒストリーを記録することができた。とくに研究計画に記した3つの調査系統、系統1：極限環境下で生き抜く伝統知の記録・収集、系統2：家畜行動と牧畜生産性の特定、系統3：家畜管理法と労働投下量の計数化・可視化、すべてにおいて良質な実証データの収集することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、西部モンゴル遊牧民(モンゴル系・オイラート系・カザフ人)の草原適応の知と技法(家畜飼養術・在来植物利用法・狩猟技術・資源利用など)の伝統知について、網羅的かつ科学的記録を実施した。その一部は、モンゴル人およびカザフ人の無形文化遺産の定義の情報源や、辞書などにも収録されている。

研究成果の概要(英文)：This study empirically elucidated the adaptation strategies of Arctic Mongolian nomads to extreme environments through field research. In particular, this study enables to record a vast amount of oral histories of survival strategies and traditional ecological knowledge (TEK) of disaster reduction passed down from ancient times, through a total of 10 times of field survey trips (total about 200 working-days) and interviews with more than 300 people. In particular, the study was able to collect high-quality empirical data in all three parts of the research tasks described in the research plan: T1: recording and collecting traditional knowledge for survival in extreme environments; T2: identifying livestock behavior and pastoral productivity; and T3: quantifying and visualizing livestock management methods and labor input.

研究分野：人文地理学/生態人類学

キーワード：アルタイ山脈 西部モンゴル遊牧民 伝統知(TEK) オーラルヒストリー ヒューマン・エコロジー 生存戦略 狩猟 草原世界

1. 研究開始当初の背景

本研究は極北系モンゴル遊牧民の極限環境への適応戦略を実証的に解明する。とくに現地で古より受け継がれてきた生存戦略の伝統知(TEK)の興行と、減災術の有用性に注目した。以下3つの系統によりこれら伝統知の詳細な体系化を試みる。

調査系統 : 極限環境下で生き抜く伝統知の記録・収集

調査系統 : 家畜行動と牧畜生産性の特定

調査系統 : 家畜管理法と労働投下量の計数化・可視化

上記の達成により 1) 遊牧民の在来知の体系化→環境適応力と減災力を強化した「環境共生型牧畜」の確立に一石を投じる。さらに 2) 極限環境下での生存戦略の解明→異なる居住環境下に応じた環境適応術を解明することで社会評価の新たな研究モデルを提示する。

2. 研究の目的

(1) 研究の学術的背景

研究動向及び位置づけ：

本研究は、モンゴル西北部に暮らす西部モンゴル遊牧民に連綿と受け継がれる「気候変動と極限環境への適応戦略」を実証的に解明する。モンゴル遊牧民は草原だけではなく、山岳、森林タイガ、砂漠など、固有環境への適応を可能とした独自の伝統知(TEK)を編み出すことにより過酷な環境を生き延びてきた。同国では2000/01年と2009/10年、国の1/3にのぼる大量の家畜が死亡する大災害“ゾド”(冬季の複合寒雪災害)に見舞われた。この災害発生以降、遊牧民の環境適応力の低下が問題となり、マクロレベル(全球規模)、ミドルレベル(県村規模)、で研究が蓄積された。例えばゾド災害の生態メカニズムと気候変動の研究[篠田・森永 20051, 小宮山 2002] (に該当)では、遊牧民を取り巻く環境変化による牧畜存続の悲観的未来が突きつけられた。またゾド被害の社会的影響・評価[尾崎 20113, 中村 20134] (に該当)により、牧畜体制の見直しも求められている。急激な気候変動に直面するモンゴルの未来を見すえ、本研究はミクロレベル(宿営コミュニティ規模)での牧畜世帯の災害対処術を詳細に解明することで、先行研究の成果を深化させる位置にある。

着想に至った経緯：

申請者は2010年以降、西部モンゴルのゾド被害の臨地調査を進めてきた。同地域は国内最大の後発開発地域であり、かつ遠隔地であることから十分な災害支援が行き渡らなかった経緯がある。そこで現地の遊牧民が実践する古より受け継ぐ伝統的な環境適応術と減災術の有用性に注目した。例えば、畜糞の飼料としての再利用、放牧巡回による草原の過負荷回避術、天然資源(根雪、水源、樹木、ソーダなど)の活用術、などの実践には家畜被害を最小限に抑える効果がある。また鷹狩猟による動物毛皮を獲得した防寒具作製も行われる。これら知見から山岳環境や極限冷温下に適応した遊牧民の生存戦略の解明が不可欠であるとの着想を得た。とくに同地域は研究寡少であり、遊牧民の生活水準と実態には不明な点が多い。さらに深刻な気候変動の影響により従来の放牧活動の刷新も迫られる転換点にあることから、本テーマの解明は緊急性を要しているといえる。

これまでの研究成果を発展させる内容等：

大災害をへて現代の遊牧社会は(i) 環境適応と減災の伝統知が失われつつあること、(ii) 伝統知によるレジリエンスを凌駕する気候変動が迫っていること、(iii) 草原の許容と管理を超えた家畜が飼養されていること、の3つの問題に直面することが明るみとなった。

これらの解決のために本研究は OP1. 遊牧民の在来知の体系化、OP2. 極限環境下での生存戦略の解明、OP3. 地域コミュニティへの科学的知見と成果の還元、を達成目標(アウトプット)とする。これにより、申請者のこれまでの宿営コミュニティ単位での研究成果を基盤とした「環境共生型牧畜モデル」の提唱で、当該テーマを飛躍的に発展させる可能性がある。

3. 研究の方法

本研究の調査地(SS)はモンゴル西部ホブド県、オブス県、バヤン・ウルギー県の主要48宿営地から6地点(+3予備地点)(図2)を選定し、集中的な住み込み滞在型のフィールドワークを実

施する。各 SS 地点からは調査対象インフォーマント 2 世帯ずつ(合計 12 世帯)を選定した。同地域には山岳部と冷温地帯が広がり、冬季には - 50°C にもなる過酷な生活環境にある。そのため、現在も駆使される伝統知の収集と実見が見込まれる。各調査地には簡易ウェザーステーション(ケストル社製品 5500)を設置し、宿营地ごとの居住地の環境計測を合わせて行う。課題遂行には以下 3 つの調査系統に 5 つの方法(T1 ~ T5)を適用する。

【調査系統 極限環境下で生き抜く在来知の記録・収集】

T1. 牧畜世帯(約 300 世帯)を対象に対面式の構成的インタビューを実施する。アンケート(設問数約 22 問)を用いて 家畜管理技術、減災術、移動頻度・適地選定プロセス、禁忌・伝承、自然環境に関するフォークロア、の 5 つのカテゴリーを集中的に記録する。

【調査系統 家畜行動と牧畜生産性の特定】

T2. 家畜群の歩行距離・範囲などを GPS 機器(Gamin 社 eTrex10 / Hollux 社製品 M-241)により計測する(図 3)。

T3. 集乳量 / 乳製品生産量を測定し、世帯毎の酪農生産力を特定する。

【調査系統 家畜管理技術の可視化】

T4. 家畜管理行動および日帰り放牧を行動観察し、アクトグラフにより可視化・分析する(図 4)。

T5. 心拍数計測機器(Fitbit 社製品 FB405BKL)を用いて日々の活動量を測定し、牧畜世帯の労働投下量およびエネルギー効率(kcal/kcal)を測定する。

【研究成果とアウトプット】

《系統 》T1 では古来の教訓や原則を整理し災害対処の知と技法を集成する。クラスター分析や一般化線形モデルの手法により在来知の特性・地域固有性を体系化する[OP1]。具体的にはコミュニティでの(i) 伝統知の保有状況、(ii) 現在の実践状況・共有率、(iii) 空間的広まり、などを検証する。

《系統 》T2 では GPS 追跡と地理情報システム(GIS)[QGIS ver. 2.14]により(i) 家畜行動の特性、(ii) 放牧範囲と食圧分布、を分析する。これらと T3 の集乳量・乳製品生産量データとの対応から世帯毎の牧畜生産力を特定する。

《系統 》T4 ~ T5 では異なる居住環境間で(i) 家畜放牧技術、(ii) 労働効率、の相互比較をする。系統 ~ で得られた各変数を調査地別に統合することで「極限環境下での生存戦略」の知と技法を実証的に解明することができる[OP2]。以上のシーケンスにより、人文系研究だけでは十分に導き出せなかった遊牧民の環境適応戦略に文理融合の手法で肉迫する。

4 . 研究成果

2017 年度

初年度(2017 年度)は、とくに現地で古より受け継がれてきた生存戦略の伝統知(TEK)と、減災術の記録の記録・回収に重点を置いた定量社会調査を実施した。以下 3 つの系統によりこれら伝統知の詳細な体系化を試みる。調査系統 : 極限環境下で生き抜く伝統知の記録・収集 / 調査系統 : 家畜行動と牧畜生産性の特定 / 調査系統 : 家畜管理法と労働投下量の計数化・可視化。2017 年度は第 I 期 ~ 第 III 期のフィールド調査(実働日数 58 日間)により、次の 1 ~ 3 のデータ収集を実施した。

1. 課題「T1 定量社会調査」を牧畜世帯(117 世帯)を対象に対面式の訪問調査で実施した。インタビューからは冬季災害(ゾド)への対処方法、在来薬用植物の利用法、家畜の傷病対処などの生活技法や家畜飼養に関する伝統知が多数収集された。また、動植物や気象予知法に関するオーラルヒストリーなど、民俗学上の定性データも多数収集された。

2. 課題「T2 家畜行動群の GPS 計測」「T3 集乳量 / 乳製品生産量」を実務支援者 3 名とともに実施した。また、各世帯の家畜群から選び出したヒツジ・ヤギ 3 頭の首に GPS 機器を装着し行動分析を行った。

3. 遊牧民のライフコース調査からは、オオカミやユキヒョウからの家畜襲撃についての体験談が多数聞かれ、とくにユキヒョウによる獣害被害の現状とローカルな対策が明らかとなった。

2017 年度の成果と活動報告は、独自開設のウェブサイト「相馬拓也研究室」(somatakuya.jp)を通じて公開している。また「雲南懇話会(第 42 回)」(2017 年 9 月 23 日)、「ユキヒョウ・シンポジウム 2018」(2018 年 3 月 10 日)の 2 度の講演会で一般に向けて発表し、広く意見や改善点の回収も行った。

2018 年度

2018 年度は第 期 ~ 第 期のフィールド調査(実働日数 58 日間)により、次の課題 1 ~ 3 のデータ収集を昨年より継続した。

1. 課題「T1. 定量社会調査」を、対面式の訪問調査により牧畜世帯 60 世帯に実施した。インタビューでは、冬季災害(ゾド)への防災・減災術・災害対処法や、家畜防衛の伝統知が収集された。また種雄の選定基準の世帯間個性や共通点や、ローテーションによる遺伝的欠損の回避などの

家畜繁殖法が収集された。また、昨年度に引き続き、野生動植物、気象予知法に関する民俗学的にも貴重なオーラルヒストリーが多数記録された。

2. 課題「T2.家畜行動群のGPS計測」「T3.集乳量/乳製品生産量」を実務支援者3名とともに実施した。また、各世帯の家畜群から選び出したヒツジ・ヤギに加え、ウシ、ラクダでもGPS機器を装着した追跡調査による行動特性を調査した。

3. 課題「T4.家畜管理行動および日帰り放牧の行動観察」「T5.牧畜世帯の労働投下量およびエネルギー効率(kcal/kcal)測定」では、5世帯の男性5名、女性5名を対象に合計11日間の計測を実施した。

調査地を拡大してのデータ収集により、地域・集団・民族個別の「防災・減災術」「家畜管理法」「在来知」の客観的な比較が可能となり、社会評価の新たな研究モデルを提示する準備が整いつつある。これら2018年度の成果と活動報告は、ひきつづき独自開設のウェブサイト「相馬拓也研究室」(somatakuya.jp)を通じて公開した。また「Conservation Asia 2018」(2018年8月8日)、「Aging - Life, Culture, Civilization (UBIAS Symposium of the year 2018)」(2018年12月20日)など、国際学会でも成果発表の機会を得たことで、情報発信と敷衍の双方で進展があった。

2019年度

2019年度は第1期～第2期のフィールド調査(実働日数40日間)により、データ収集を継続した。2018～2019年にかけては、政権交代の影響により、ホブド県等での調査許可の取得に時間がかかったため、予備調査地ウムヌ・ゴビ県セブレイ郡でデータ収集を実施した。

1. 課題「T1.定量社会調査」を対面式の訪問調査によりウムヌ・ゴビ県のラクダ遊牧世帯18世帯に実施した。インタビューでは、ラクダの乳利用、水源確保など、乾燥地特有の適応戦略の伝統知が多数収集された。調査では、水源利用や種雄の選定基準などの家畜繁殖法が収集された。フィールド調査と並行して、実務支援者2名が独自にホブド県ムンフハイルハン郡、アルハンガイ県イヒタミル郡を訪れ、合わせて93件のアンケート調査を実施した。

2. 課題「T2.家畜行動群のGPS計測」「T3.集乳量/乳製品生産量」を実務支援者2名とともに実施した。今年度は各世帯の家畜群から選び出したヒツジ・ヤギおよびラクダにGPS機器を装着して追跡・行動特性調査を実施した。

3. 課題「T4.家畜管理行動および日帰り放牧の行動観察」「T5.牧畜世帯の労働投下量およびエネルギー効率(kcal/kcal)測定」では、2世帯の男性2名、女性2名を対象に合計4日間の計測を実施した。

これら2019年度の成果・活動は、独自開設のウェブサイト「相馬拓也研究室」(somatakuya.jp)を通じて公開した。また複数の講演会「Migrations: Movement of People, Ideas, and Goods (UBIAS Symposium of the year 2019)」(2019年10月17日)、「名古屋大学 人文地理学セミナー」(2020年1月23日)、で成果発表の機会を得られた。

2020年度

2020年度は、これまでの収集した定量社会調査と家畜行動分析のデータを補完する研究計画であったが、COVID-19により海外渡航ができないなかで、これまでのデータ精査および理論的構築のための文献調査に費やした。

2021年度は20年度に引き続き、モンゴル国の入国制限により渡航がかなわなかったものの、これまでの知見とデータに理論的な考察を加えることで、伝統知のアクシオロジー、環境適応アロスタシス、伝統知の示唆する防災・減災術、などの理論的視座を整備することができた。

おもな論点として近年リーディングセオリーとなりつつある、地質年代「人新世(アントロポセン)」の時代における、遊牧文化のサステナビリティについて考察した。また、霊長類・人類の進化をめぐる議論で盛んとなった「自己家畜化 self-domestication」の論戦のなかで、遊牧民の環境適応と生存戦略が、どのような意味を持ち、また論理的介入ができるのかを模索した。

まとめ

本助成研究「西部モンゴル遊牧民による気候変動および極限環境への適応戦略の解明」での調査では、集中的なフィールド調査を通じて、モンゴル遊牧民の環境適応と生存戦略の実態を、実証的に明らかとすることができた。とくにモンゴル遊牧民の環境適応と生存のための選択的手段によるフィードバックとは、地域の環境保全に自律的な恒常性をもたらす「変位性適応能(アロスタシス allostasis)」と定義することの実証性を得ることができた。この「環境適応アロスタシス」の概念は、人類の社会的動物としての生物進化に加えて、極限環境やアネクメーネを人類の生息圏に替えた集団・コミュニティ・社会・国家の階層化や、生体内部の環境適応やニッチ構築を説明するスキームを提案してくれるものと思われる。

そして、遊牧民の環境適応力は、在来資源の広範な利用方法や、防災・減災・災害対処術に裏打ちされていることが明らかとなった。こうした4カ年のフィールドワークやインタビューによる実証研究から、「民俗防災学」(folklore-based disaster reduction)という新たな枠組みの着想を得ることができた。在来の伝統知を防災・減災に活かそうとする試みとして、民俗防災学の枠組みは、世界の遊牧民に限らず、伝統的な生業を営む農業・漁業をはじめ、先住民や狩猟採集民の知的体系をコミュニティ開発や社会実践へと統合できる、より高次の段階へと引き上げられる

可能性を秘めている。既存のデータに新たな視座を含めた議論は、『草原の掟 西部モンゴル遊牧社会における生存戦略のエスノグラフィ』（ナカニシヤ出版、2022年1月）として出版し、本助成課題の一定の成果として示すことができた。

本研究では、地方での若者の遊牧離れと人口流出によるマンパワーの喪失、そして減災の伝統知の継承者不足など、社会問題化するコミュニティの災害対処能力の低下などの現代的課題をもあぶりだすことができた。そして、モンゴルの自然環境を圧迫し、災害リスクの増長を加速させるのは、ほかでもない遊牧民の放牧態度や、草原資源の搾取にもその原因の多くが由来することを、暫定的な《答え》として提示している。

遊牧民の培った草原への適応力と、幾度ものゾド災害への防災・減災・災害対処の伝統知 T.E.K. は、遊牧民が人類の叡智に残した貢献として再評価することができる。モンゴル遊牧民は、定期的にかかるゾドを生活の一部として能動的に受容し、酷寒の大地と過酷な自然環境に寄り添う環境変化の適応者として自らを客体化することで、草原世界を生き抜いてきた。ローカルな環境保全にグローバルな姿勢で取り組む昨今の社会的要請に、本研究の中核テーマでもある「遊牧民の環境適応・生存戦略・防災減災術」は、環境適応アロスタシスのもっとも実践的なケーススタディとして応答できる有益な展望を見いだすことができた。

研究成果：

国際共同研究（1件） / 雑誌論文（11件 うち国際共著 1件、査読あり 5件、オープンアクセス 7件） / 学会発表（19件 うち国際学会 5件、招待講演 7件） / 書籍（2件）

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 7件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 16 (1): |
| 2. 論文標題 ユキヒョウの保全生態をめぐる伝承《ナラティブ》と科学的根拠《エビデンス》の複合型生物誌 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 E-Journal GEO | 6. 最初と最後の頁 275-283 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4157/ejgeo.16.287 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 第20回 |
| 2. 論文標題 ヒマラヤ山脈にアグロフォレストリー国際協力の可能性を探る: ネパールでの植林・果樹栽培によるコミュニティ開発の経験から | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 「中央ユーラシアと日本の未来」(筑波大学NipCA講演会) | 6. 最初と最後の頁 1-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 756 |
| 2. 論文標題 遊牧民と動物、地図生成への導きのコスモロジー | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ユリイカ | 6. 最初と最後の頁 275-283 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 vol.15 (no.2) |
| 2. 論文標題 西部モンゴル遊牧民の日帰り放牧にみる家畜管理技術と土地利用分析 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 E-Journal GEO | 6. 最初と最後の頁 374-396 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 越境する鷹狩文化:中央ユーラシアを駆ける鷹狩と鷹匠の世界 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 鷹狩の日本史 | 6. 最初と最後の頁 324-326 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 54 |
| 2. 論文標題 若手研究者の考えるヒトと動物の関係学の今後と展望 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌 | 6. 最初と最後の頁 1-6 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 13巻2号 |
| 2. 論文標題 ユキヒョウの民俗学: 西部モンゴル遊牧民に伝わるユキヒョウ殺しと狩猟儀礼の伝承誌 (オーラルヒストリー) | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 E-Journal GEO | 6. 最初と最後の頁 420-438 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4157/ejgeo.13.420 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 第11号 |
| 2. 論文標題 西部モンゴル遊牧社会における伝統知を活用した民俗防災学とコミュニティ開発の提唱 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 早稲田大学高等研究所紀要 | 6. 最初と最後の頁 145-158 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 第4章 |
| 2. 論文標題 アルタイ山脈の古カザフ語地名と土地利用観の民族地理学 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 国土地理協会 学術研究助成報告集 | 6. 最初と最後の頁 183-204 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 Soma Takuya, Schlecht Eva | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 The relevance of herders' local ecological knowledge on coping with livestock losses during harsh winters in western Mongolia | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Pastoralism: Research, Policy and Practice | 6. 最初と最後の頁 1-14 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13570-017-0108-y | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 巻 12(2) |
| 2. 論文標題 ユキヒョウとモンゴル遊牧民のコンフリクト: オーラルヒストリーで読み解く目撃・遭遇事故と家畜被害 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 E-Journal GEO | 6. 最初と最後の頁 217-232 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4157/ejgeo.12.217 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 5件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 中央ユーラシアの遊牧民と野生動物をめぐる聖と死のナラティブ |
| 3. 学会等名 日本文化人類学会2020年度学術大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 ヒトと野生動物のシルクロード、知られざる“動物秘話”教えます！ |
| 3. 学会等名 京大サマープログラム2021（京都大学高大連携事業）（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 シルクロードに伝わる秘技、騎馬鷹狩文化の起源を求めて |
| 3. 学会等名 筑波大学「中央ユーラシアと日本の未来」第32回講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takuya Soma |
| 2. 発表標題 Diasporic Ethno-Community of the Kazakhs across Central Eurasia: “Mobility and Migration” from the Perspectives of Nomadic Social Contexts |
| 3. 学会等名 Migrations: Movement of People, Ideas, and Goods (UBIAS Topic of the year 2019)（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 考古学徒・野村栄三郎の旅したモンゴル高原：『蒙古新疆旅行日記』をめぐる追憶のフィールドワーク |
| 3. 学会等名 人文地理学会2019年度学術大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 地理学者が挑む野生動物と人類の調和社会の実現 |
| 3. 学会等名 名古屋大学環境学研究科令和元年度人文地理学セミナー（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 極限環境を生きる民族誌：西部モンゴル遊牧民の生存戦略における減災術と植生利用 |
| 3. 学会等名 日本文化人類学会2017年度学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Takuya Soma |
| 2. 発表標題 “Narrative and Evidence” between Snow Leopard and Mongolian Nomadic Herders: Oral History and S.E.K. (Scientific Ecological Knowledge) for Complex Conservation Ecology |
| 3. 学会等名 Conservation Asia 2018 (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takuya Soma |
| 2. 発表標題 Roles of a Fieldworker in Aging Society: Studies in Ethnography about the Four Inevitables (Birth/ Aging/ Sickness/ Death) in Human Life of Western Mongolian Nomads |
| 3. 学会等名 Aging - Life, Culture, Civilization (UBIAS Topic of the year 2018) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 カザフ・イーグルハンターと騎馬鷹狩文化にみるエコロジーとヒューマニティ |
| 3. 学会等名 東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」 生業、娯楽、奢侈の観点から（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 地理学系フィールド・サイエンスの描き出す学融合時代の民族誌(エスノグラフィ): モンゴルとネパールのフィールドを事例に |
| 3. 学会等名 早稲田人類学会第20回総会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 シンポジウム: 若手研究者の考えるヒトと動物の関係学の今後と展望 |
| 3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会第25回学術大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 極限環境を生きる民族誌: 西部モンゴル遊牧民の生存戦略における減災術と植生利用 |
| 3. 学会等名 日本文化人類学会 2017年度学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 アルタイ山脈の在来カザフ語地名と土地利用観の民族地理学 |
| 3. 学会等名 日本地理学会 春季学術大会2018 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 遊牧民の民間伝承（オーラルヒストリー）からユキヒョウと地域を守る |
| 3. 学会等名 ユキヒョウ・シンポジウム2018 野生からの出張セミナー（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 鷲使い“イーグルハンター”の民族誌：カザフ騎馬鷹狩文化をめぐる文化遺産保護とイヌワシ保全生態の現状と展望 |
| 3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会 第24回学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takuya Soma |
| 2. 発表標題 Ethnography of Altaic Kazakh Eagle-Hunters: Art and Knowledge of Horse-Riding Falconry in Western Mongolia |
| 3. 学会等名 International Festival of Falconry 2017（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 アルタイ山脈のユキヒョウと遊牧民：生態観察、獣害対策、民俗伝承の複合型生物誌の研究 |
| 3. 学会等名 雲南懇話会（第42回）（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相馬 拓也 |
| 2. 発表標題 ユキヒョウの民俗学：希少動物との共存をめぐる西部モンゴル遊牧民の民間伝承 |
| 3. 学会等名 日本文化人類学会 2017年度学術大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 360 |
| 3. 書名 草原の掟 西部モンゴル遊牧社会における生存戦略のエスノグラフィ | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 相馬 拓也 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 244 |
| 3. 書名 鷲使い（イーグルハンター）の民族誌：モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

早稲田大学高等研究所 相馬拓也研究室
<http://somatakuya.jp/>

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|